

青年期における死の不安と「死」・「生」・「自己」のイメージ

尾方 綾・岡本祐子

The death anxiety and images of “death”, “life” and “self” in adolescence

Aya Ogata and Yuko Okamoto

本研究は、意識的な死の不安と「死」「生」「自己」のイメージの関連を検討することを目的に、Death anxiety scale (DAS) と「死」「生」「自己」の捉え方のパターン及びSD法によるイメージとの関連を検討した。「死」「生」「自己」の捉え方のパターンは、概念間の心的距離を基にクラスタ分析を行い、「死」を「生」「自己」から離す“「死」分離群”，全てを近いものとする“全近接群”，「死」と「自己」を離す“「死-自己」分離群”，全てを離す“全分離群”を死-生-自己マトリクスとして抽出した。DAS得点、死-生-自己マトリクスとSD法の「死」「生」「自己」のイメージの関連を検討した結果、各DAS得点群、死-生-自己マトリクスの違いによる「死」「生」「自己」の捉え方の違いが示された。全近接群は「死」を身近に捉えることと意識上の死の不安の低さの関連が示唆され、「死」分離群は「死」を日常から離すことで意識上の死の不安が軽減される可能性が示唆された。意識上の死の不安が同程度でも、イメージ水準における死の捉え方は異なり、死の不安について「死」のイメージから検討する必要性が示唆された。

キーワード: 死生観, 青年期, 死の不安, 死に対するイメージ, Death anxiety scale (DAS)

問題と目的

1. 青年期と死のテーマ

平成 23 年の人口動態統計 (厚生労働省大臣官房統計情報部, 2012) によると、自殺による死亡者は全死亡者数の 2.3% であり、死亡原因の 7 位に位置するが、15-19 歳では、不慮の事故に次いで自殺が死亡原因の 2 位であり、20-24 歳, 25-29 歳, 30-34 歳, 35-39 歳では自殺が死亡原因の 1 位である。また、青年期は生の目標や生きがいを問う時代であり、平山 (1991) は、動揺の多いこの時期には、何らかのかたちで人生の意義や生の意味、死に対する関心をもつものが多いとしている。このように、青年期の内的世界を理解しようとするとき、「死」のテーマは重要であると考えられる。

2. 死の不安

Freud (1926 井村訳 1970) は、不安は漠然とした対象のない恐れ感情であり、特定の経路による緊張解除の作用をともなう特殊な不快状態であるとし、心的危機の予知としての信号不安と、内

的安定のための防衛機制について論じている。不安は、しかるべき理由があり、怖れられる対象が明白であり、それに対して対決するにせよ逃避するにせよ、我々がしかるべき対処ができる現実不安 (笠原, 1983) と、分からない危険に対する神経症的不安 (Freud, 1926 井村訳 1970) に区別される。ただし、現実不安も、本質的には何を恐れているかわからないために不安が生じると考えられる。しかし、現実不安であれ神経症的不安であれ、恐れている何かを象徴するものが恐れの対象となるという意味で、わからなさを対象化しつつあるとは言えるだろう。

死の不安の場合、不安の対象は一見明白である点で現実不安だが、生命の危機に瀕していなくとも、いずれ死は免れることができない点で他の現実不安とは一線を画す。また、物理的に自己存在を喪失する点で、「自分はなぜ存在するのか」という自己存在や世界についての根源的な課題をつきつけられ乗り越えることが要請され、大きな成長可能性も秘めると同時に、大きな自己更新を迫られる点で、心的水準での死の不安の問題にリンクし、神経症的不安をも惹起しうると考えられる。

この点に関し、死が不可知で体験することができないため、意識の上では病気や災害に対する不安に置き換えられるとする考えや、死を恐れることは、死そのものを恐れるというよりも、死によって喪失してしまうことに対する恐れである (Levitt, 1966 西川訳 1969) という考えがある。宮本 (1983) は、不安の消退が、不安から逃げるところではなく、不安を受け入れるところに生ずるとし、「死の不安」は死と直面しての不安ではなく、死を拒否することによる不安であることを暗示するとしている。また、丸山 (1988) は、死がタブーであればある程、人間の目から死者が遠ざけられればられる程、死はいつの間にか人間の心の中にある種の原始的不安を植え付け、魔術的呪術的行為を触発する要となるとしている。

死の不安は、現実の死と心的な死を自分の中でどう位置づけるのかという大きな不可知性に対する恐れであると考えられる。さらに、死をタブー化し、死を遠ざけることによって、より深く原始的な不安を植え付けることになる。したがって、死をどのように受け止め、自分の中に位置づけるのかということの第一歩は、死の不安を不安として捉えることであると考えられる。

3. 死の不安をどのように捉えるか

死の不安を捉えるために、Templer (1970) の Death anxiety scale (DAS) などの質問紙法が多く用いられている。DAS は 15 項目 2 件法の質問紙であり、高得点ほど死の不安が強いとされる。DAS は一般的不安とは別の不安を測っていることが主張されているが、問題点として、低得点の説明が困難であることが指摘されている (金児, 1994)。低得点者は、本当に死の不安が低いのか、死への無関心や、大きな不安から抑圧が生じているのか、得点からは判別できないためである。岡村 (1983) は、自己報告による意識水準の測定の結果からは適応的であれ不適応的であれ何らかの防衛性の存在が推定されると述べている。つまり、DAS などの自記式の質問紙では、意識水準の死の不安を対象とするため、無意識下に働く防衛について明確に測定することはできない可能性が考えられる。このように、無意識下に抑圧される可能性のある死の不安について検討するためには、より無意識に近い水準でどのように死を捉えているのかについても検討する必要があると言える。

4. 死のイメージ

死の不安の背後には、心的な死の見え方、すなわち死のイメージがあると考えられる。死のイメ

ージは、あまりに自我に受入れにくい場合に無意識下に抑圧されると考えられ、死の根本的な不可知性はそのような心的態度に、よりつながりやすいと考えられる。

より無意識に近い水準での心的体験について、Jung (1964 河合訳 1975) は言葉やイメージはそれが明白で直接的な意味以上の何ものかを包含しているときに、象徴的で、それは、より広い無意識の側面を有しており、その側面は決して正確に定義づけたり完全に説明したりされないものであるとしている。河合 (1991) は、内界にはそれ自体の自律性があり、人間の反省の及ばぬ領域があるとし、イメージはそのような内界と深く関わっているとしている。さらに、イメージと感情体験との密接な関わりが示唆されている (藤岡, 1983 ; 河合, 1991 ; 水島, 1988)。イメージは、主体的な関わりや感情と密接に関係しており、意識を超えたところから意識に語りかけるものであると言える。死の不安は、現実の死と心的な死を自分の中でどう位置づけてよいかという不可知性によるものと述べたが、そのため、意識上では死の不安を不安として捉えられず、無意識下に留められ、意識されないこともあるだろう。その場合においても、死のイメージを検討することで、意識されない不安についても検討することが可能であると考えられる。

死のイメージについて、自由記述法やSD法、KJ法などを用いた研究がある。青年期を対象とした諸研究において、死に対する態度について「ネガティブ」な反応だけでなく、「ポジティブ」な反応も見られることが示唆されている (藤井, 2003 ; 石坂, 2003, 2004 ; 丹下, 2002)。また、石坂 (2003) は、死に対して肯定、否定の相反する両方の意味づけをし、それを意識している「アンビバレント」という新たなカテゴリも見出している。丹下 (2002) は、「死」という語からの連想語として「生」に関するカテゴリを見出している。

SD法を用いた研究では、例えば岡村 (1983) は、「死」「自分」「人生」「病気」「老人」という概念のイメージ、及び、各概念間の距離を、SD法を用いて調査している。その結果、「死」は成人の方がより「正確な」とイメージし、青年の方がより「一貫した」「長い」「四角い」「つめたい」とイメージしていることが示されている。また、概念間距離については、青年後期・プレ成人期では「死」との距離において「自分」「人生」は「病気」「老人」とは区別された大きな距離を持つのにに対し、青年前期は「死」との距離において「自分」「人生」「老人」が1群となって「病気」とは区別された大きな距離を持つという結果が得られている。

李 (1990) は、単独形容詞SD法には、両極性の尺度上では中点に評定されていたものの内容をより明確にしうるとし、単独形容詞SD法を用いて、青年がもつ「生」「死」「言葉」「身体」のイメージを測定している。その結果、青年は、「生」「死」「言葉」「身体」に対して、肯定的と否定的の両方のイメージを同時にもち、両者を共存させていることが示されている。また、松下・尾方 (2007) は、単独形容詞SD法を用い、青年期における「死」「生」「自己」のイメージの全体像を検討している。その結果、「生」「自己」にポジティブなイメージを、「死」にネガティブなイメージを抱くが、各概念ともに「大きい」「深い」イメージを抱き、「軽々しい」「疎遠な」イメージは弱いことから、「死」「生」「自己」それぞれが青年期にとって重要なテーマとして捉えられていると指摘している。

死のイメージと死の不安との関連について、松下・尾方 (2007) は、DAS得点の高低で、SD法による「死」「生」「自己」のイメージの違いを検討し、「死」を肯定的に受け入れられない態度と死の

不安の高さに関連があること、「死」「生」「自己」を自分のものとして捉えられないことと死の不安の低さが関連していることを明らかにしている。しかし、これは DAS で測定しうる意識的な死の不安の高さに限った知見と言える。さらに、SD 法は調査者側が用意した形容詞対のイメージの測定に限られるという問題がある。特に、「死」のような、自己との関係や位置づけを捉えにくく対象化しにくいものは、明確に言語化するイメージとしては意識化しにくいと考えられる。そのような、明確に言語化しにくいが存在しているイメージにアプローチする必要があると考えられる。

その点に関し、死や生を含めた世界観をどのようにイメージしているかに関して、死や生を内界に位置づける際のより無意識的な視点を抽出しようとする研究がある。松下 (2000) は箱庭療法や描画法の一つである Grünwald の空間象徴図式の実証的検討の 1 つとして、空間に世界を感じ取る無意識的な視点を抽出している。図式に含まれる、「死」-「生」、「光」-「影」等の対になる象徴語 20 語に「自己」を加えた 21 語をもとにした 2 語 1 対、計 210 対について、各象徴語のイメージが本質的に近いか遠いかを、「1=本質的に同じ」から「25=本質的に異なる」までの 25 段階で評定してもらい (高根, 1980), この評定値をもとに多次元尺度法で分析した結果、3 次元が抽出されている。第 1 次元 (DIM1) も第 2 次元 (DIM2) も「生」と「死」が近くに位置し、「生」と「死」は本質的に非常に近いものとしてイメージされているのに対し、第 3 次元 (DIM3) は「生」と「死」が本質的に遠いものとしてイメージされていることが特徴的であるとされており、DIM1 と DIM2 は、DIM3 とは、相互排除的な視点であることが確認されている。また、DIM1 では、「生」「死」が、「自己」と近いものとしてイメージされており、DIM2 では、「生」「死」は、「自己」とは遠いものとしてイメージされている。これらの 3 次元は「生」と「死」をどのように位置づけ、「自己」とどのように関連付けているのかの違いによると考えられ、「死」と「生」が本質的に近いものとイメージされる次元と、遠いものとイメージされる次元のいずれを個人の中で重み付けるかによって、「死」のイメージと空間イメージが変化することが明らかにされている。また、松下・尾方 (2009) は、松下 (2000) の方法を簡便化し、「死」「生」「自己」の主観的な非類似度を問い、クラスタ分析を行った。その結果、「死」と「自己」のみ離す「死-自己」分離群、「死」のみ離す「死」分離群、全て離す全分離群、全て近いものとする全近接群の 4 群が得られ、このような、「死」「生」「自己」を心的にどう位置づけるのかという指標を「死-生-自己マトリクス」と名づけた。

死のイメージを捉える上で、その人が「死」や「生」を心的にどのように捉え、位置づけているのかによって、「死」という象徴語のイメージや捉え方は異なる可能性があり、今後、死のイメージを捉えていく上で、その人が「死」や「生」を、「自己」とどのように関連づけ、どのように捉えているのかを踏まえる必要があると考えられる。「死」を「生」「自己」とどう関連づけ位置づけているか、対象間の非類似度の測定をもとに分析することで、より無意識水準の言語化しにくいイメージを抽出しうると思われる。さらに、死の不安の高低や死のイメージの関連を検討することで、DAS のような自記式の質問紙だけでは捉えられない死の不安について検討できると考えられる。

5. 本研究の目的

そこで、本研究では、青年期における「死」「生」「自己」のイメージと、死の不安の関連を検討することを目的とする。具体的には、DAS 得点に見られる死の不安、および、死-生-自己マトリク

ス、すなわち「死」「生」「自己」の捉え方のパターンと、SD法による「死」「生」「自己」のイメージとの関連を検討する。

方 法

1. 調査協力者

大学生・大学院生 202 名 (平均 19.55 歳, $SD=1.32$, 18-25 歳)。男性 50 名 (平均 19.18 歳, $SD=1.26$, 18-22 歳), 女性 152 名 (平均 19.68 歳, $SD=1.32$, 18-25 歳)。

2. 手続き

集団法にて質問紙調査を実施。質問紙は以下の通りである。①死の不安尺度 (DAS) 金児 (1994) による DAS (Templer, 1970) の邦訳版, 15 項目, 2 件法 (はい, いいえ)。②単独 SD 法による「死」「生」「自己」のイメージを測定する各 40 項目, 5 件法 (1.あてはまらない-5.あてはまる)。項目は, 柏木 (1963), 岡村 (1983), 李 (1990), 渋谷・渋谷 (1991), 丹下 (2002), Franz (1984 氏原訳 1987) を基に, 20 対, 計 40 個の形容詞を独自に採用した。③「死」「生」「自己」の主観的な本質的非類似度を問う質問紙。3 項目。「死-生」, 「生-自己」, 「死-自己」それぞれの非類似度を 1 から 25 までで評定を求めた。

結 果

1. DAS の得点処理

DAS について, 「はい」を 1 点, 「いいえ」を 0 点 (逆転項目は「はい」を 0 点, 「いいえ」を 1 点) として被調査者ごとに合計得点を算出した (平均値=10.50, 中央値=11.00, $SD=2.48$ 。パーセンタイルは 25%が 9.00 点, 75%が 12.00 点)。

2. 死-生-自己マトリクスの抽出

「死」「生」「自己」の捉え方のパターンを検討するため, 「死」「生」「自己」の主観的な非類似度を問う 3 項目についてクラスタ分析 (Ward 法) を行った結果, 4 クラスタが抽出された。各クラスタの特徴を検討するため, 「死」「生」「自己」の主観的な非類似度を問う 3 項目を従属変数とする分散分析を行った結果, 全ての項目で有意差 (「死-生」: $F(3, 198)=258.46, p<.01$, 「生-自己」: $F(3, 198)=84.49, p<.01$, 「死-自己」: $F(3, 198)=64.22, p<.01$) が見られたため, 多重比較 (Tukey HSD, Dunnett の C) を行った (Table 1)。

Table 1
各死-生-自己マトリクスの「死」「生」「自己」の非類似度の平均値の比較

項目	クラスタ1 (78名)	クラスタ2 (42名)	クラスタ3 (59名)	クラスタ4 (23名)	F 値	有意確率	下位検定
死-生	平均値	22.21	5.74	7.58	21.70	$p<.01$	1, 4>2, 3**
	標準偏差	3.30	4.61	4.15	3.84		
生-自己	平均値	6.56	4.10	11.12	20.74	$p<.01$	4>3>1>2**
	標準偏差	3.80	3.43	5.67	4.14		
死-自己	平均値	15.05	5.43	17.02	21.39	$p<.01$	4>1, 3>2**
	標準偏差	6.42	3.44	4.30	3.95		

Note. ** $p<.01$

クラスタ1は「死」を「生」「自己」と離していると言えた。クラスタ2は「死」「生」「自己」を全て近いものと捉えていると言えた。クラスタ3は「死」と「自己」のみ離していると言えた。クラスタ4は「死」「生」「自己」を全て離して捉えていると言えた。しかし、クラスタ1の「死-自己」、クラスタ3の「生-自己」は、外れ値により回答の幅が広がったため、各クラスタに含まれるデータの特徴がより忠実に反映されるよう、クラスタ1の「死-自己」は平均値の1SDより低い者13名を、クラスタ3の「生-自己」は平均値の1SDより高い者8名を除外し、再度分散分析を行った。その結果、有意差（「死-生」： $F(3, 177) = 212.70, p < .01$ 、「生-自己」： $F(3, 177) = 90.26, p < .01$ 、「死-自己」： $F(3, 177) = 105.04, p < .01$ ）が見られたため、多重比較（Tukey HSD, DunnettのC）を行った（Table 2）。各クラスタの特徴から、松下・尾方（2009）同様、クラスタ1を「死」分離群（65名）、クラスタ2を全近接群（42名）、クラスタ3を「死-自己」分離群（51名）、クラスタ4を全分離群（23名）と名づけた。以下の分析は、これらを死-生-自己マトリクスとして扱う。

Table 2

外れ値を除外した各死-生-自己マトリクスの「死」「生」「自己」の非類似度の平均値の比較

		クラスタ1 (65名)	クラスタ2 (42名)	クラスタ3 (51名)	クラスタ4 (23名)	F値	有意確率	下位検定
死-生	平均値	21.97	5.74	7.92	21.70	212.70	$p < .01$	1, 4>2, 3** 3>2*
	標準偏差	3.47	4.61	4.18	3.84			
生-自己	平均値	6.95	4.10	9.78	20.74	90.26	$p < .01$	4>3>1>2*
	標準偏差	3.80	3.43	4.78	4.14			
死-自己	平均値	17.15	5.43	17.24	21.39	105.04	$p < .01$	4>3, 1>2*
	標準偏差	4.64	3.44	3.98	3.95			

Note. ** $p < .01$, * $p < .05$

3. DAS 得点と死-生-自己マトリクスとの関連について

意識的な死の不安の高さと「死」「生」「自己」の無意識的な捉え方のパターンの関連を探るため、死-生-自己マトリクスを独立変数、DAS 得点を従属変数として分散分析を行った。有意差（ $F(3, 177) = 3.55, p < .05$ ）が見られたため、多重比較（Tukey HSD）を行った結果、「死」分離群が全近接群よりも有意に DAS 得点の平均値が高かった（Table 3）。意識的な死の不安の高さは、「死」を「生」「自己」と離して捉えるか、近いと捉えるかで異なり、「死」を「生」「自己」と離して捉える方が意識的な死の不安が高いと言える。

Table 3

各死-生-自己マトリクスの DAS 得点の平均値の比較

		1.「死」分離群	2.全近接群	3.「死-自己」分離群	4.全分離群	F値	有意確率	下位検定
DAS得点	平均値	11.20	9.69	10.28	10.52	3.55	$p < .05$	1>2**
	標準偏差	2.08	2.92	2.19	2.75			

Note. ** $p < .01$

4. DAS 得点および死-生-自己マトリクスの種類と SD 法による「死」「生」「自己」のイメージとの関連の検討

SD 法項目において欠損値の多数見られた 5 名は、分析ごとに除外した（「死」分離群=65 名、全近接群=41 名、「死-自己」分離群=48 名、全分離群=22 名）。DAS は四分位数を基準に、12 点以上を高群、11、10 点を中群、9 点以下を低群として、被調査者を群分けした（高群=63 名、中群=60 名、低群=53 名）。DAS 群と死-生-自己マトリクスの関連を SD 法項目から検討するため、各 SD 法項目において DAS 群 (3) ×死-生-自己マトリクス (4) の 2 要因分散分析を行った。

1) DAS 得点と SD 法による「死」「生」「自己」のイメージとの関連 Table 4 に、「死」「生」「自己」についての SD 法項目で、DAS 群の主効果が見られたものを示した。有意差が見られた項目は多重比較 (Tukey HSD) を行った。

Table 4
各 DAS 得点群の各 SD 法項目の平均値の比較

SD 法項目		高群	中群	低群	F 値	有意確率	下位検定
d4.ぼんやりした	平均値	3.69	3.05	3.32	3.35	$p < .05$	n.s
	標準偏差	1.23	1.31	1.20			
d10.苦しい	平均値	4.10	3.74	3.41	6.10	$p < .01$	高>低**
	標準偏差	0.94	0.85	1.09			
d12.暗い	平均値	4.30	3.92	3.88	3.57	$p < .05$	高>中, 低*
	標準偏差	0.70	0.97	0.92			
d17.大きい	平均値	3.78	3.33	2.94	4.80	$p < .01$	n.s
	標準偏差	1.32	1.24	1.35			
d21.はげしい	平均値	2.65	2.08	2.20	4.11	$p < .05$	n.s
	標準偏差	1.10	1.04	1.05			
d29.未知の	平均値	4.52	4.36	3.82	5.78	$p < .01$	高, 中>低*
	標準偏差	1.10	0.94	1.06			
d39.有限の	平均値	3.02	2.99	2.34	3.79	$p < .05$	高, 中>低*
	標準偏差	1.53	1.29	1.27			
l9.楽しい	平均値	4.23	3.89	3.77	3.43	$p < .05$	n.s
	標準偏差	0.94	0.73	0.93			
l11.明るい	平均値	4.06	3.82	3.59	3.72	$p < .05$	高>低*
	標準偏差	0.83	0.82	0.98			
l17.大きい	平均値	3.93	3.72	3.38	2.83	$p < .01$	n.s
	標準偏差	1.11	1.07	1.23			
l20.浅い	平均値	1.84	1.86	2.26	3.31	$p < .05$	低>高*
	標準偏差	0.77	0.84	1.06			
l22.おだやかな	平均値	3.63	3.39	3.12	3.27	$p < .05$	高>低*
	標準偏差	0.94	0.82	1.21			
l39.有限の	平均値	4.43	3.87	3.97	4.05	$p < .05$	高>中* 高>低**
	標準偏差	0.92	1.14	1.04			

Note. ** $p < .01$, * $p < .05$

(1) 「死」のイメージ: 「苦しい」 ($F(2, 164) = 6.10, p < .01$), 「暗い」 ($F(2, 164) = 3.57, p < .05$), 「未知の」 ($F(2, 164) = 5.78, p < .01$), 「有限の」 ($F(2, 164) = 3.79, p < .05$) で DAS 高群が低群より有意に平均値が高かった。

(2) 「生」のイメージ：「明るい」 ($F(2, 163)=3.72, p<.05$), 「おだやかな」 ($F(2, 163)=3.27, p<.05$), 「有限の」 ($F(2, 163)=4.05, p<.05$) で DAS 高群が低群より有意に平均値が高かった。「浅い」 ($F(2, 163)=3.31, p<.05$) は DAS 低群が高群より有意に平均値が高かった。

以上の結果から、DAS 高群は低群に比べ、「死」に、「苦しい」「暗い」「未知の」「有限の」というイメージ、「生」に、「明るい」「おだやかな」「有限の」「浅くない」というイメージを抱いていると言える。

2) 死-生-自己マトリクスと SD 法による「死」「生」「自己」のイメージとの関連 Table 5, 6, 7 に、「死」「生」「自己」についての SD 法項目で死-生-自己マトリクスの主効果が見られたものを示した。有意差が見られた項目は多重比較 (Tukey HSD) を行った。Table 8 に、死-生-自己マトリクスごとに有意差が見られた項目をまとめた。

Table 5
各死-生-自己マトリクスの各 SD 法項目の平均値の比較 (「死」のイメージ)

SD法項目		1.「死」分離群	2.全近接群	3.「死-自己」分離群	4.全分離群	F値	有意確率	下位検定
d1.一貫した	平均値	2.61	3.41	3.11	2.32	6.81	$p<.01$	2>1* 2>4** 3>4*
	標準偏差	1.06	0.97	1.18	1.17			
d4.ぼんやりした	平均値	3.00	3.71	3.48	3.24	2.93	$p<.05$	ns
	標準偏差	1.31	1.24	1.06	1.39			
d5.優しい	平均値	1.81	2.32	2.36	1.81	5.08	$p<.01$	2,3>1**
	標準偏差	0.86	0.94	0.85	0.91			
d15.あたたかい	平均値	1.79	2.27	2.24	1.80	4.06	$p<.01$	2>1** 3>1*
	標準偏差	0.86	0.92	0.80	1.01			
d25.親しい	平均値	1.50	2.10	1.89	1.69	3.80	$p<.05$	2>1*
	標準偏差	0.73	1.12	0.93	0.84			
d26.疎遠な	平均値	2.90	2.47	3.15	2.44	3.47	$p<.05$	3>2*
	標準偏差	1.20	1.11	1.11	1.18			
d27.愛に満ちた	平均値	1.99	2.54	2.60	1.99	4.50	$p<.01$	3>1*
	標準偏差	1.02	1.04	0.95	1.15			
d33.平等な	平均値	3.19	3.92	3.63	2.94	3.20	$p<.05$	2>4*
	標準偏差	1.44	1.25	1.37	1.51			
d35.日常の	平均値	2.09	3.08	2.81	2.82	5.85	$p<.01$	2>1** 3>1*
	標準偏差	1.16	1.24	1.18	1.40			
d40.無限の	平均値	3.09	3.62	3.32	2.62	3.01	$p<.05$	ns
	標準偏差	1.29	1.21	1.28	1.50			

Note. ** $p<.01$, * $p<.05$

Table 6

各死-生-自己マトリクスの各 SD 法項目の平均値の比較 (「生」のイメージ)

SD法項目		1.「死」分離群	2.全近接群	3.「死-自己」分離群	4.全分離群	F値	有意確率	下位検定
I1.一貫した	平均値	3.14	3.10	2.50	2.57	4.25	$p < .01$	$1 > 3^*$
	標準偏差	1.08	1.08	1.00	1.20			
I4.ぼんやりした	平均値	2.66	3.23	3.26	3.05	3.12	$p < .05$	<i>n.s.</i>
	標準偏差	1.11	0.98	1.09	1.46			
I8.不完全な	平均値	2.65	3.51	3.45	2.66	5.47	$p < .01$	$3 > 1^*$
	標準偏差	1.27	1.29	1.24	1.56			
I10.苦しい	平均値	2.91	3.47	3.04	2.61	2.70	$p < .05$	$2 > 4^*$
	標準偏差	1.23	1.17	1.11	1.12			
I11.明るい	平均値	4.17	3.79	4.07	3.26	6.97	$p < .01$	$1,3 > 4^{**}$ $1 > 2^*$
	標準偏差	0.74	0.89	0.73	1.18			
I13.うつくしい	平均値	3.78	3.48	3.65	3.03	2.87	$p < .05$	$1 > 4^*$
	標準偏差	0.99	0.97	1.03	1.38			
I21.はげしい	平均値	3.24	3.59	3.41	2.57	4.62	$p < .01$	$1,3 > 4^*$ $2 > 4^{**}$
	標準偏差	1.07	1.13	0.96	1.12			
I22.おだやかな	平均値	3.72	3.35	3.42	3.03	3.07	$p < .05$	$1 > 4^*$
	標準偏差	0.80	1.00	1.02	1.26			
I23.活動的な	平均値	4.14	4.02	3.99	3.34	4.55	$p < .01$	$1 > 4^{**}$ $2,3 > 4^*$
	標準偏差	0.85	0.75	0.90	1.15			
I25.親しい	平均値	3.90	3.72	3.73	3.11	3.53	$p < .05$	$1 > 4^*$
	標準偏差	0.94	0.91	0.89	1.24			
I27.愛に満ちた	平均値	3.97	3.87	3.85	3.26	3.17	$p < .05$	$1 > 4^*$
	標準偏差	0.93	0.85	0.90	1.15			
I30.既知の	平均値	3.07	2.71	2.65	2.10	4.03	$p < .01$	$1 > 4^{**}$
	標準偏差	1.18	1.10	1.01	1.15			
I31.重々しい	平均値	2.71	3.13	2.91	2.26	3.21	$p < .05$	$2 > 4^*$
	標準偏差	1.08	1.09	1.10	1.24			

Note. $**p < .01$, $*p < .05$

Table 7

各死-生-自己マトリクスの各 SD 法項目の平均値の比較 (「自己」のイメージ)

SD法項目		1.「死」分離群	2.全近接群	3.「死-自己」分離群	4.全分離群	F値	有意確率	下位検定
s2.矛盾した	平均値	3.29	3.78	3.81	3.02	4.58	$p < .01$	$2,3 > 4^*$
	標準偏差	1.01	1.01	0.93	1.36			
s4.ぼんやりした	平均値	3.51	3.86	3.86	3.23	2.91	$p < .05$	<i>n.s.</i>
	標準偏差	1.05	0.92	0.88	1.19			
s5.優しい	平均値	3.53	3.29	3.11	2.70	3.86	$p < .05$	$1 > 4^*$
	標準偏差	0.97	0.98	1.03	1.29			
s9.楽しい	平均値	3.65	3.50	3.09	2.95	4.14	$p < .01$	$1 > 3,4^*$
	標準偏差	0.87	0.90	1.10	1.24			
s10.苦しい	平均値	2.62	3.43	3.11	2.61	4.84	$p < .01$	$2 > 1^{**}$ $2 > 4^*$
	標準偏差	1.08	1.02	1.17	1.08			
s12.暗い	平均値	2.38	2.79	2.89	2.29	2.77	$p < .05$	<i>n.s.</i>
	標準偏差	1.00	1.12	1.10	1.25			
s17.大きい	平均値	3.20	3.15	2.76	2.48	2.67	$p < .05$	<i>n.s.</i>
	標準偏差	1.16	1.15	1.22	1.27			
s19.深い	平均値	3.51	3.81	3.75	2.97	3.61	$p < .05$	$2,3 > 4^*$
	標準偏差	1.16	0.89	0.86	1.25			
s25.親しい	平均値	3.45	3.73	3.58	2.85	3.80	$p < .05$	$2,3 > 4^*$
	標準偏差	0.94	0.69	1.16	1.28			
s29.未知の	平均値	3.53	4.03	4.02	3.52	3.14	$p < .05$	<i>n.s.</i>
	標準偏差	1.11	0.94	0.88	1.20			
s32.軽々しい	平均値	2.16	1.99	2.52	1.95	2.70	$p < .05$	<i>n.s.</i>
	標準偏差	0.95	1.00	1.02	0.82			
s35.日常の	平均値	3.97	3.90	3.86	3.11	4.35	$p < .01$	$1 > 4^{**}$ $2,3 > 4^*$
	標準偏差	0.90	0.82	0.93	1.44			
s37.始まりの	平均値	2.64	3.19	3.01	2.33	3.58	$p < .05$	<i>n.s.</i>
	標準偏差	1.15	1.07	1.10	1.23			

Note. $**p < .01$, $*p < .05$

Table 8

死-生-自己マトリクスで主効果が見られた SD 法項目

		死	生	自己
全近接群	> 「死」分離群	一貫した, 優しい, あたたかい, 親しい, 日常の		苦しい
	> 「死-自己」分離群			
	> 全分離群	一貫した, 平等な	苦しい, 活動的な, 重々しい	矛盾した, 苦しい, 深い, 親しい
「死-自己」分離群	> 「死」分離群	優しい, あたたかい, 愛に満ちた, 日常の	不完全な	
	> 全近接群	疎遠な		
	> 全分離群	一貫した	明るい, はげしい, 活動的な	矛盾した, 深い, 親しい
「死」分離群	> 全近接群		明るい	
	> 「死-自己」分離群		一貫した	楽しい,
	> 全分離群		明るい, うつくしい, はげしい, おだやかな, 活動的な, 親しい, 愛に満ちた, 既知の	優しい, 楽しい
全分離群	> 「死」分離群			
	> 全近接群			
	> 「死-自己」分離群			

(1) 全近接群: 「死」には, 「死」分離群よりも「一貫した」「優しい」「あたたかい」「親しい」「日常の」などのイメージを抱き, 全分離群よりも「一貫した」「平等な」などのイメージを抱く。「生」には, 全分離群よりも「苦しい」「活動的な」「重々しい」イメージを抱く。「自己」には, 「死」分離群よりも「苦しい」イメージを抱き, 全分離群よりも「矛盾した」「苦しい」「深い」「親しい」イメージを抱く。これより全近接群は, 「死」分離群や全分離群に比べて, 「死」をポジティブで身近なものとして捉え, 「生」「自己」にネガティブなイメージを抱き, 「自己」を「矛盾した」アンビバレントなものとして捉えていると言える。

(2) 「死-自己」分離群: 「死」には, 「死」分離群よりも「優しい」「あたたかい」「愛に満ちた」「日常の」などのイメージを抱き, 全近接群よりも「疎遠な」イメージを抱き, 全分離群よりも「一貫した」イメージを抱く。「生」には「死」分離群よりも「不完全な」イメージを抱き, 全分離群よりも「明るい」「はげしい」「活動的な」イメージを抱く。「自己」には, 全分離群よりも「矛盾した」「深い」「親しい」イメージを抱く。これより「死-自己」分離群は, 「死」には全近接群と同様なイメージを抱くと言えるが, 全近接群よりも「疎遠な」ものとイメージしていることが異なる。また, 「生」にポジティブなイメージを抱き, 「自己」にネガティブなイメージを抱いていないということが, 全近接群と異なる。

(3) 「死」分離群：「生」には、全近接群よりも「明るい」イメージを抱き、「死-自己」分離群よりも「一貫した」イメージを抱き、全分離群よりも「明るい」「うつくしい」「はげしい」「おだやかな」「活動的な」「親しい」「愛に満ちた」「既知の」イメージを抱く。「自己」には、「死-自己」分離群よりも「楽しい」イメージを抱き、全分離群よりも「優しい」「楽しい」イメージを抱く。これより「死」分離群は、「死」には明確で特徴的なイメージが見られず、ポジティブなイメージが少ないことから潜在的なネガティブイメージを抱くと推測される。「死」分離群は「死」のみ離して捉える群だが、日常に生きる「自己」に軸足を置き、それを脅かす「死」を日常から切り離すと言える。

(4) 全分離群：「死」「生」「自己」それぞれ確固としたイメージがなく、このようなイメージのされにくさが、全てを離して捉えるあり方と関連していると考えられる。

以上、死-生-自己マトリクスの違いによって「死」「生」「自己」のイメージが異なることが示された。

「死」のイメージは、全近接群と「死-自己」分離群はポジティブなイメージを抱くが、「死-自己」分離群は全近接群よりも「死」を「疎遠な」ものと捉えている点で異なっていた。全近接群は「死」と「自己」の近さに特徴があり、「死-自己」分離群は「死」を「自己」と「疎遠な」ものと離す点に特徴がある。このような「死」のイメージの位置づけの違いは、両者の「生」「自己」イメージの違いと関連すると考えられる。すなわち、全近接群は「死」をポジティブなもの、「生」をネガティブなものとして捉え、その両者を近いものとして結びつける「自己」を、「苦しい」が「親しい」アンビバレントなものとして捉える。一方「死-自己」分離群は、「死」も「生」も「自己」もネガティブなイメージがないが、「生」は「不完全」なものであり、「自己」は「矛盾した」ものと捉えていた。「死」は「疎遠な」ものと捉えていた。つまり、「死」は「生」きている「自己」の不確かさとは隔たった、ある種理想のような位置づけを担っている可能性がある。

これと正反対のあり方が「死」分離群である。「生」「自己」はポジティブなイメージだが、「死」に明確なイメージを持たず、潜在的にネガティブなイメージを持っているということが推察されるに止まっている。「生」「自己」にリアルなポジティブイメージを抱き、「死」をイメージしにくいということが、「死」を「生」「自己」と離すというあり方に繋がっていると考えられる。

3) 各 DAS 群と死-生-自己マトリクスの関連 各 DAS 群、死-生-自己マトリクスの間に交互作用が見られた項目について単純主効果の検定 (Bonferroni) を行った。

(1) 「死」のイメージ

(a) 「はげしい」 ($F(6, 164)=4.18, p<.01$) : 「死」分離群では DAS 低群は高群・中群より平均値が有意に高かった。全分離群では DAS 高群は低群より平均値が有意に高かった。DAS 高群では全近接群・全分離群は「死」分離群より平均値が有意に高かった (Figure 1)。

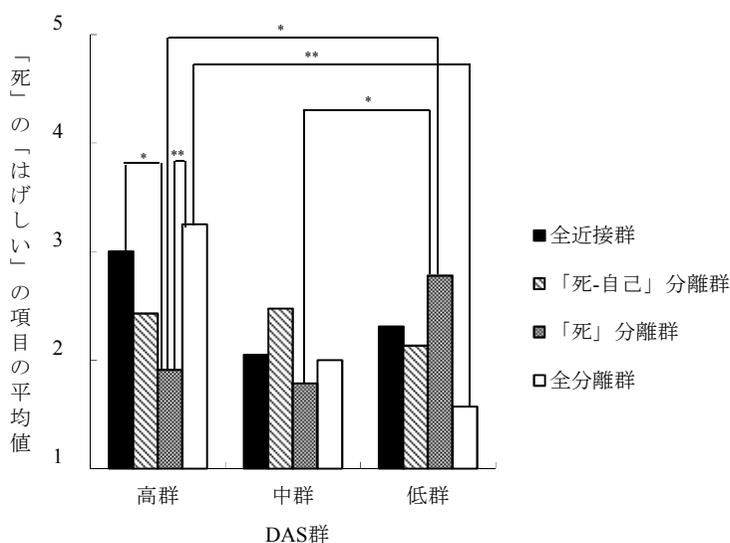


Figure 1. 各 DAS 群と死-生-自己マトリクスの「死」の「はげしい」という項目における平均値の比較 (** $p < .01$, * $p < .05$)

(b) 「既知の」 ($F(6, 164) = 2.96$, $p < .01$) : 「死-自己」分離群では DAS 中群は高群より平均値が有意に高かった。DAS 高群では全分離群は「死-自己」分離群より平均値が有意に高かった (Figure 2)。

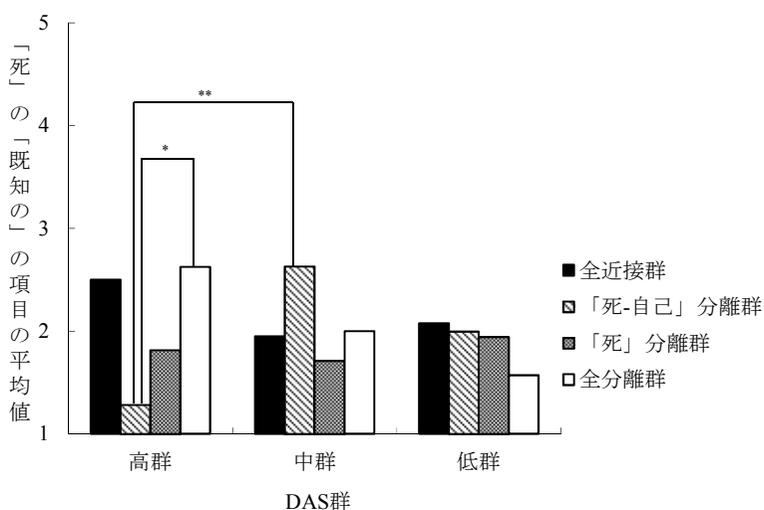


Figure 2. 各 DAS 群と死-生-自己マトリクスの「死」の「既知の」という項目における平均値の比較 (** $p < .01$, * $p < .05$)

以上の交互作用の結果から、「死」のイメージについて次のことが言えよう。

①「死」分離群は全体的に「死」に特徴的なイメージは見られなかったが、意識上の死の不安が低いと「死」に「はげしい」イメージを抱いており、「死」に動的なイメージを見出すことと意識上の死の不安の低さに関連があると言える。

②全分離群も全体的に「死」に特徴的なイメージは見られなかったが、意識上の死の不安が高いと「死」に「はげしい」「既知の」イメージを抱いており、「死」を知ることと意識上の死の不安の高さに関連があると言える。

③「死-自己」分離群は全体的に「死」にポジティブであると同時に「疎遠な」イメージが見られたが、意識上の死の不安が高いと「既知の」イメージが低くなると言える。このことから、「死」を知らないことと意識上の死の不安の高さに関連があると言える。

また、有意傾向ではあったが、意識上の死の不安が低い場合でも、「死」分離群や全分離群は「死」を「苦しい」とイメージしている可能性が示唆された。

(2) 「生」のイメージ

(a) 「重々しい」 ($F(6, 163) = 2.67, p < .05$) : 全分離群では DAS 低群は高群・中群より平均値が有意に高かった。DAS 高群では全近接群は全分離群より平均値が有意に高かった。DAS 中群では「死-自己」分離群は全分離群より平均値が有意に高かった (Figure 3)。

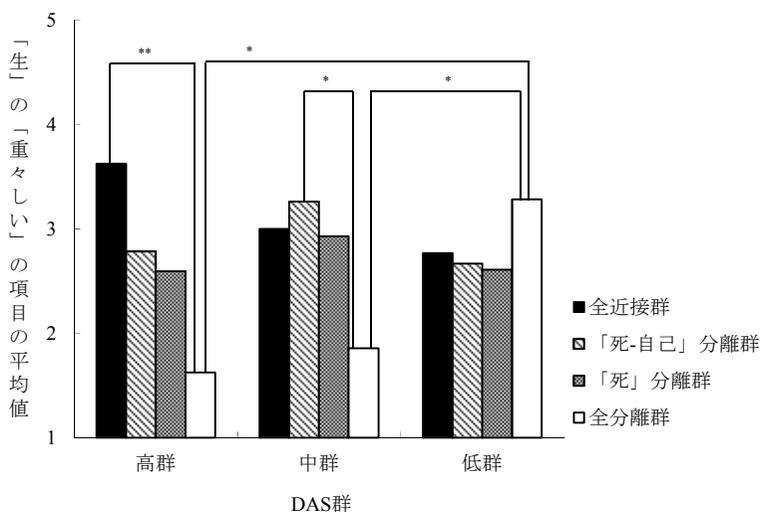


Figure 3. 各 DAS 群と死-生-自己マトリクスの「生」の「重々しい」という項目における平均値の比較 (** $p < .01$, * $p < .05$)

以上の結果から、「生」のイメージについて次のことが言えよう。

①全分離群は全体的に「生」に特徴的なイメージは見られなかったが、意識上の死の不安が低いと「生」に「重々しい」イメージを見出すと言えた。

(3) 「自己」のイメージ

(a) 「あたたかい」 ($F(6, 161) = 2.48, p < .05$) : 全分離群では DAS 高群は低群より平均値が有意に高かった。DAS 低群では「死」分離群・全近接群・「死-自己」分離群は全分離群より平均値が有意に高かった (Figure 4)。

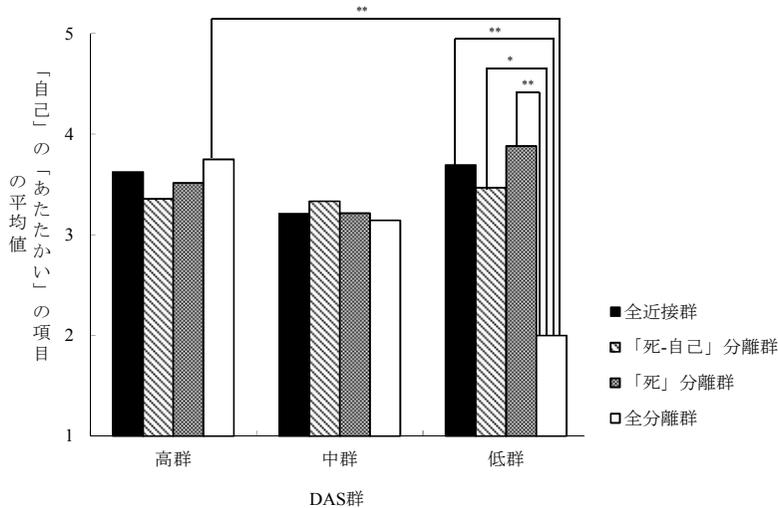


Figure 4. 各 DAS 群と死-生-自己マトリクスの「自己」の「あたたかい」という項目における平均値の比較 (* $p < .01$, * $p < .05$)

以上の結果から、「自己」のイメージについて次のことが言えよう。

①全分離群は全体的には「自己」に特徴的なイメージは見られなかったが、意識上の死の不安が高いと「自己」に「あたたかい」イメージを抱くと言える。このことから、「自己」に「あたたかい」といった肯定的なイメージが高いと、自己の存在を揺るがす死の不安が意識されやすいと言える。

考 察

本研究では、意識的な死の不安と「死」「生」「自己」のイメージの関連を検討することを目的とした。また、DAS 得点の高低をより詳細に検討することを目的とした。

「死」「生」「自己」をどのように捉えているか、「死」「生」「自己」の本質的非類似度を問う質問項目についてクラスタ分析を行い、各クラスタの特徴を検討した結果、「死」のみ離して捉える「死」分離群、「死」「生」「自己」全て近いものと捉える全近接群、「死」「自己」のみ離して捉える「死-自己」分離群、「死」「生」「自己」全て離して捉える全分離群の、4つの群が抽出され、死-生-自己マトリクスと名づけた。

各 DAS 群、各死-生-自己マトリクスにおける「死」「生」「自己」のイメージを検討するため、各 SD 法尺度項目について、DAS (3) × 死-生-自己マトリクス (4) の 2 要因分散分析を行った結果、次のことが言えた。

まず、DAS 群の主効果から、意識上の死の不安の高さによって「死」や「生」のイメージが異なることが示された。具体的には、DAS 高群、つまり意識上の死の不安が高い方が、「死」に「苦しい」「暗い」「未知の」「有限の」イメージを、「生」に「明るい」「おだやかな」「有限の」「浅くない」イメージを抱いていた。

次に、死-生-自己マトリクスの主効果から、「死」「生」「自己」のイメージは、それらをどのように相互に位置づけているかによって異なることが示された。具体的には、全近接群と「死-自己」分離群は、「死」にポジティブなイメージを抱いている点で共通しているが、「生」「自己」のイメージや、それらと「死」の位置づけが異なっていた。全近接群は「生」にネガティブなイメージ、「自己」にアンビバレントなイメージを抱き、「死-自己」分離群も、「死」にポジティブなイメージを抱くが、全近接群より「死」を「疎遠な」ものと捉えていると言えた。一方「死」分離群は、「生」「自己」にポジティブなイメージを、「死」に潜在的にネガティブなイメージを抱くと言えた。

さらに、DAS 群と死-生-自己マトリクスの交互作用から、同じ DAS 群、死-生-自己マトリクスであっても「死」「生」「自己」のイメージに違いが見られることが分かった。

全近接群は、「死」「生」「自己」を全て近いものと捉え、全体的特徴としては「死」にポジティブなイメージを抱く群である。また、「死」分離群より意識上の死の不安が低く、「死」を身近に捉えることと意識上の死の不安の低さに関連があると言えた。

「死-自己」分離群は、全体的特徴としては「死」にポジティブなイメージを抱く一方、「疎遠な」ものと捉えることが示されたが、交互作用の結果、「死」を「知らない」ことが意識上の死の不安の高さに関連し、「死」に「既知の」感覚を得られると意識上の死の不安が低くなる可能性が示唆された。「死」と「自己」を離すあり方の場合、「死」を捉えたいのに捉えられない、知らないことが、死の不安を高める可能性があると考えられる。

「死」分離群は、全体的特徴としては「生」「自己」にポジティブなイメージを抱く一方、「死」にネガティブな潜在イメージを抱くことが示されたが、交互作用の結果、意識上の死の不安が低い場合、「死」に「はげしい」イメージが見られた。「死」分離群は「生」に動的なイメージを抱くが、「死」にも「生」に共通するような動的なイメージを抱くことが意識上の死の不安の低さに関連すると言えた。「死」分離群は潜在的には「死」にネガティブなイメージを持ち、「生」や「自己」を脅かす「死」を日常から離して捉えると考えられるが、日常から離すことで意識上の死の不安が軽減される可能性が考えられる。一方で、ネガティブに捉えていた「死」に、ポジティブな「生」と共通する働きを見出すことで、意識上の死の不安が軽減される可能性が考えられる。

全分離群は、「死」「生」「自己」全てを離して捉え、全体としては「死」「生」「自己」それぞれ明確なイメージがないという特徴が見られた。交互作用の結果、意識上の死の不安が高い場合、「死」に「はげしい」「既知の」イメージを見ていた。すなわち、「死-自己」分離群や「死」分離群とは反対に、「死」の動的な面を視野に入れることや、「死」を知ることが、意識上の死の不安の高さにつながる言える。また、意識上の死の不安が低い場合、「生」に「重々しい」イメージを抱きやすく、高い場合、「自己」に「あたたかい」イメージを抱きやすいと言えた。「死-自己」分離群は「死」を目標のように捉え、「自己」と遠いものと捉えている可能性があり、「死」を「知る」感覚が得られ

ることで意識的な死の不安が軽減されると考えられた。また「死」分離群は「死」を「生」「自己」と異なるネガティブなものとして捉えるが、「死」に「生」「自己」と共通のイメージを見ることで意識的な死の不安が軽減すると考えられた。この2群とは異なり、全分離群は「死」をリアルなものとして捉えたくないという意味で遠ざけていると考えられる。そのため、「生」を「重々しい」など、リアルに感じると意識的な死の不安が軽減される可能性が考えられる。また、「あたたかい」「自己」を失う不安が意識的な死の不安の高さにつながる可能性が考えられる。

また、有意傾向ではあるが、意識上の死の不安が低い者でも、「死」分離群や「死-自己」分離群は「死」に「苦しい」イメージを抱きやすい可能性が示唆された。このことから、DASで測定される意識上の死の不安が低い者でも、「死」を離して捉える者ではイメージ水準においては「死」を「苦しい」と捉える者も存在している可能性が示唆された。

以上のことから、意識的な死の不安は「死」のイメージと関連するが、加えて「生」や「自己」のイメージも影響すると言える。すなわち、「死」のイメージを捉えるには、「生」や「自己」をどのようなものとして捉え、「死」が「生」や「自己」との間でどう意味づけられているかを見ていく必要がある。例えば、全近接群と「死-自己」分離群のように、「死」のイメージだけ見ると同じような言葉で表現されていても、「生」や「自己」のイメージや位置づけを照らし合わせることで、「生」や「自己」にとっての「死」の意味が異なることがわかる。

また、意識上の死の不安について、「死」「生」「自己」を心的にどのように位置づけているかを踏まえて検討することが重要と言えた。さらに、DASなどで測定できる意識的な死の不安の高低と、無意識的な「死」の捉え方が、必ずしも一致しない可能性があることが示唆された。DASの弱点の1つとして、低得点者の説明が困難であるということが挙げられている(金児, 1994)。これまでの研究では、DAS低得点者の解釈が各研究者によって異なっていた。本研究によって、DAS低得点者の中にも死に肯定的な意味づけをしている者だけでなく、死を日常から切り離して捉える者も存在することが明らかとなった。また、DAS低得点者の中にも、イメージ水準では死に「苦しさ」を感じる者も存在する可能性が示唆された。このことから、意識的な死の不安の高さや低さを捉える上で、死への無意識的な態度の違いを踏まえて考えることによって、不安の高さが同程度であっても、その質的な側面の違いを捉えることが可能であると考えられるであろう。

引用文献

Franz, M. L. (1984). *Traum und Tod: Was uns die Träume Sterbender sagen*. München: Kösel-Verlag GmbH & Co.

(フォン-フランツ, M. L. 氏原 寛 (訳) (1987). 夢と死——死の間際に見る夢の分析—— 人文書院)

Freud, S. (1926). *Hemmung, Symptom und Angst*. Wien: Internationale Psychoanalytischer Verlag.

(フロイト, S. 井村恒郎 (訳) (1970). 制止, 症状, 不安 フロイト著作集 6 人文書院 pp.320-376.)

藤岡喜愛 (1983). イメージ——その全体像を考える—— 日本放送出版協会

- 藤井美和 (2003). 大学生のもつ「死」のイメージ——テキストマイニングによる分析—— 関西学院大学社会学部紀要, **95**, 145-155.
- 平山正実 (1991). 死生学とはなにか 日本評論社
- 石坂昌子 (2003). 死の意味づけの質的検討と量的検討——死に対する心理の理解 (1) —— 日本心理学会第 67 回大会発表論文集, 300.
- 石坂昌子 (2004). 死の意味づけの関連要因の検討——死の対する心理の理解 (2) —— 日本心理学会第 68 回大会発表論文集, 289.
- Jung, C. G., Franz, M. L., Henderson, J. L., Jacobi, J., & Jaffé, A. (1964). *Man and his symbols*. London: Aldus Books Limited.
- (ユング, C. G., フォン・フランツ, M. L., ヘンダーソン, J. L., ヤコビー, J., ヤッフエ, A. 河合隼雄 (訳) (1975). 人間と象徴——無意識の世界—— 河出書房新社)
- 金児暁嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観 人文研究大阪市立大学文学部紀要, **46**, 1-28.
- 笠原 嘉 (1983). VI 不安・ゆううつ・無気力——正常と異常の境目—— 飯田 真・笠原 嘉・河合隼雄・佐治守夫・中井久夫 (編) 岩波講座精神の科学 3 精神の危機 岩波書店 pp. 207-260.
- 柏木繁男 (1963). S-D 法による意味構造の因子論的研究 心理学研究, **35** (1), 27-31.
- 河合隼雄 (1991). イメージの心理学 青土社
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 (2012). 平成 23 年人口動態統計上巻 厚生統計協会
- Levitt, E. E. (1966). *The psychology of anxiety*. Indiana: Bobbs-Merrill.
- (レヴィット, E.E. 西川好夫 (訳) (1969). 不安の心理学 法政大学出版社)
- 丸山久美子 (1988). 死とエトス——現代青年の社会不安と死生観—— 聖学院大学論叢, **1**, 163-178.
- 松下姫歌 (2000). Grünwald の空間象徴理論における「死」の象徴性の二側面 箱庭療法学研究, **13** (1), 73-88.
- 松下姫歌・尾方 綾 (2007). 青年期における死の不安と「死」・「生」・「自己」のイメージ——DAS と SD 法を用いて—— 広島大学心理学研究, **7**, 325-337.
- 松下姫歌・尾方 綾 (2009). 死別体験と「死」のイメージおよび死への態度との関連 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部 (教育人間科学関連領域), **58**, 159-168.
- 宮本忠雄 (1983). I 概論 飯田 真・笠原 嘉・河合隼雄・佐治守夫・中井久夫 (編) 岩波講座精神の科 10 有限と超越 岩波書房 pp. 1-65.
- 水島恵一 (1988). イメージの心理学 水島恵一 (シリーズ編) 人間性心理学大系第 9 巻 大日本図書
- 岡村達也 (1983). 「死に対する態度」の研究——青年と成人との比較—— 東京大学教育学部紀要, **23**, 331-343.
- 李 敏子 (1990). 生, 死, 言葉, 身体のイメージ——青年を対象として—— 心理学研究, **61** (2), 79-86.

- 渋谷園枝・渋谷昌三 (1991). 「生」と「死」のイメージ調査の基礎的分析 山梨医科大学紀要, **8**, 41-52.
- 高根芳雄 (1980). 多次元尺度法 東京大学出版会
- 丹下智香子 (2002). 「死」からの連想語の KJ 法による分類——死生観の構造の検討—— 名古屋大学紀要, **49**, 157-168.
- Templer, D. I. (1970). The construction and validation of a death anxiety scale: *The Journal of Psychology*, **82**, 165-177.